主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	汐﨑　順子

主 論 文 題 名：

子ども文庫が生まれる理由，続ける力，支える仕組み

（内容の要旨）

本論文は戦後に誕生した私的かつ自発的な活動である「子ども文庫」に焦点をあてている。その定義は以下のとおりである。民間の人びとが，主として子どものために一定の場所を確保して本を集め，提供する活動を行うこと，さらにその活動を行う子どものための私設の読書施設。この子ども文庫を成立させている要素は，活動主体（民間の人びと），活動の対象（子ども），場所と蔵書（施設・本），活動（本の提供）の四つである。

本来「文庫」という語は，書物を保存する場，という意味を持ち，それが一定のコレクションを収集・保存する蔵書空間，さらに図書館をあらわす語としても使われるようになった。本研究の「子ども文庫」はこの「文庫」の一つの形態として位置づけられる。

戦後に生まれた「子ども文庫」は，公立図書館，児童サービスが充実，普及した現在もなお日本の社会の中に存在し，定着している。私的な活動である「子ども文庫」が公的な活動である「図書館」の児童サービスに吸収され，消滅することなく両者が並行して日本の子どもの読書を支えているのはなぜだろうか。本論文ではこの子どもを対象とする「文庫」の誕生，継続，支える仕組みを明らかにする。なお筆者は「子ども文庫」を人びとが私的に図書を収集，保存し，提供する「文庫」の一つの形態と捉え，論文中では特別にことわりがない限り「文庫」を「子ども文庫」の意味で用いることとした。

文庫は終戦直後に女性，若い母親たちを中心に始まった活動である。当時は公立図書館が未整備で，子どもの読書環境は貧しかった。わが子や身近な子どもの読書環境を改善し，楽しい読書の経験をもたせたいと考えた人びとが，自ら文庫の運営者となってその活動に取り組んだ。加えて，戦後初期の文庫は女性の社会参加の場でもあったとも考えられている。文庫には，個人の家庭を利用する家庭文庫，地域の公的な施設を利用する地域文庫があり，1960 年代半ばから急速に増加した。1960 年代末には，各地域で文庫の運営者たちが協力し合うことを目的に文庫連絡会を発足した。文庫の数が最も多く活動が活発だったのは，1980 年代前半である。

主　論　文　要　旨

戦後 70 年以上が経った現在，公立図書館が普及・充実し，さまざまな面で子どもの読書環境は豊かになった。女性の自立や社会参加は当たり前になり，多くの若い母親が仕事を持ち，子育てをしながら働いている。このように，文庫を始めた当初の動機が存在しなくなったはずなのに，今も各地に文庫が存在する。高齢になっても文庫を続けている人がいるし，新たに文庫を始める人もいる。それはなぜだろうか。

筆者は，なぜ現在も文庫が生まれ，続いているのか，それを支えているものはどのようなものなのかを明らかにすることを目的に研究に取り組んだ。この「文庫はなぜ・どのようにして生まれるのか，文庫を続けさせている力，支える仕組みはどのようなものなのか」を明らかにしようと考えたとき，そもそも文庫はなぜ・どのようにして生まれたのだろうか，今の文庫はどのような状況になっているのだろうか，今の文庫はどのようにして続いているのだろうか，今の文庫を支える仕組みにはどのようなものがあるのだろうだろうか，という四つの疑問が生まれた。本論文では，この四つの疑問を論文の研究課題とし，さらに七つの検討課題を設定した。

- 研究課題 1「文庫はなぜ・どのようにして生まれたのか」の検討課題は，「文庫の草創期にはどのような人が，なぜ・どのような動機で文庫を始め，どのように取り組んだのか」（検討課題 1）である。
- 研究課題 2「今の文庫は，どのような状況になっているのか」の検討課題は，「今の文庫の運営者はどのような人びとなのか，彼らはどのように文庫を運営し，どのような活動をしているのか（検討課題 2）である。
- 研究課題 3「今の文庫は，どのようにして続いているのか」の検討課題は，「なぜ，文庫の運営者は今も活動を続けているのか」（検討課題 3），「今，文庫を始めるのはどのような人びとなのか，なぜ今，文庫を始めるのか」（検討課題 4），「文庫が継続する形にはどのようなものがあるのか」（検討課題 5）である。
- 研究課題 4「今の文庫を支える仕組みには，どのようなものがあるのか」の検討課題は，「なぜ，文庫連絡会は文庫の共同体として生まれたのか，どのような活動をしているのか」（検討課題 6），「なぜ，東京子ども図書館は私立の児童図書館として設立したのか，どのような活動をしているのか」（検討課題 7），である。

本論文では，第Ⅱ章から第Ⅷ章までの各章で，以下のようにこれら四つの研究課題と七つの検討課題を順に明らかにした。

第Ⅰ章　文庫研究の視点（序章）
第Ⅱ章　文庫のあゆみと原点（研究課題 1）
第Ⅲ章　運動と活動の現在：文庫への質問紙調査より(1)（研究課題 2）
第Ⅳ章　運営者の意識と文庫の継続：文庫への質問調査より(2)（研究課題 2,3）

主　論　文　要　旨

第Ⅴ章　現在の文庫にみる継続・継承のさまざまな形（研究課題 3）
第Ⅵ章　文庫連絡会：文庫をつなぎ活動を広げる共同体（研究課題 4）
第Ⅶ章　東京子ども図書館：「文庫」から「図書館」へ（研究課題 4）
第Ⅷ章　「私」としての文庫の役割，社会の中の文庫（終章，まとめ）

ここからは，各章の内容について述べる。

第Ⅰ章「文庫研究の視点」では本来の「文庫」について説明したうえで，本論文の「子ども文庫」を，人びとが私的に図書を収集，保存し，提供する「文庫」の一つの形態として位置づけた。この文庫を続けさせ，支えているのはどのようなものなのか，を明らかにするという研究の目的のもと，前述の四つの研究課題，七つの検討課題を設定した。次に本論文に関連する用語の整理と定義を行い，これまで文庫はどのように論じられてきたのか，文庫を知るためのどのような調査がなされたのか，文庫が社会でどのようにとらえられてきたのかについて先行研究，文庫調査を整理，検討した。これらをもとに，研究課題と検討課題を明らかにしていく道筋，研究手法について述べた。本論文では研究課題，検討課題を明らかにするために，文献調査，質問紙調査，訪問調査・聞き取り調査という複数の研究手法を採用した。これらで明らかにした知見を第Ⅱ章以下で順に述べていく。

第Ⅱ章「文庫のあゆみと原点」は，本論文の対象である「文庫」の原点を確認する章である。私的な，草の根の活動である文庫の全体像を捉えることは困難であり，戦後の文庫の動きを一連の流れで捉えた研究は存在しなかった。そこでまず先行研究，調査，関連文献の内容を整理・検討して，1950 年代から現在までについて，戦後の文庫のあゆみを草創期：萌芽と誕生の時代（1945～1964 年），発展期：普及と浸透の時代（1965～1980 年），停滞期：足踏みと模索の時代（1981～1999 年），再編成期：新しい認識と取り組みの時代（2000 年～）の四時代に区分した。そして各時代における文庫の動きを概観した。

次に，「文庫の草創期にはどのような人が，なぜ・どのような動機で文庫を始め，どのように取り組んだのか」（検討課題 1）を検討するために，1955 年と 1956 年に二つの家庭文庫を開いた土屋滋子を中心に草創期（～1964 年）の家庭文庫の主宰者たちについて整理，検討した。土屋の二つの文庫は第Ⅶ章で文庫を支える仕組みとして述べる東京子ども図書館の母体の一部となるが，そもそも土屋は子どもの本の出版や，読書を推進する活動とは無縁の専業主婦だった。その土屋がなぜ，文庫を始め，その活動を広げていったのかを辿ることは，この時代の多くの家庭文庫の運営者の動機や活動を知ることにつながる。

主　論　文　要　旨

土屋が家庭文庫を始めた最も大きな動機は「子どもとの読書の喜びの共有」であった。それは土屋自身の子ども時代の楽しい読書経験にもとづく。さらに土屋にはもう一つ「社会の中での自己実現」という動機もあった。この二つの動機は草創期の多くの家庭文庫主宰者に共通している。続けて，土屋が仲間ともに運営した二つ目の家庭文庫での活動，1957 年に発足した家庭文庫研究会の一員としての活動，児童図書館研究会との交流を通して，文庫に対する認識を変化させていった様子を示した。そもそも文庫は，個人が私的に自発的に自分のやりたいことを実現しようと始めたものだが，活動を続ける中で，社会の役に立つ仕組みであり，公益性のある活動である，という認識が生まれた。この認識は文庫の活動を広げ，続ける力につながった。

本論文ではこの章で明らかにした土屋の文庫への取り組みを第Ⅲ章以降の「現在の文庫」を検証するための重要な要素と位置づけた。なぜなら土屋の活動は草創期の家庭文庫が生まれる理由を示すだけでなく，現在の文庫における「生まれる理由，続ける力，支える仕組み」がどのようなものかを示唆していると考えたためである。草創期の家庭文庫の主宰者の多くに共通してみられたことが，今の文庫の担い手に照らした時，何が変化したのか，あるいは変化していないのかを土屋を軸に次章以降で検討していった。

第Ⅲ章と第Ⅳ章では，2010 年に筆者が実施した質問紙調査の結果（有効回答：528 件）を整理，検討した。なお 1993 年に日本図書館協会が実施した最後の全国的な文庫調査との比較も行い，考察を行った。

第Ⅲ章「運営と活動の現在：質問紙調査より（1）」では，「今の文庫の運営者はどのような人びとなのか，彼らはどのように文庫を運営し，どのような活動をしているのか」（検討課題 2），について質問紙調査の回答を集計，整理し，量的な側面から明らかにした。

文庫は数の上では減少していたが，1993 年調査以降も活動の地域性に大きな変化はなく，長年にわたり活動を続けている文庫が多かった。少数だが，新しい文庫が毎年各地に生まれていることも明らかになった。前回の調査との比較では，家庭文庫の比率が増加していること，特に家庭文庫では施設や蔵書の充実の傾向が強いこと，新旧それぞれの文庫で運営者の高齢化と少人数化が進んでいること，などの変化がみられた。文庫を利用する子どもの数にも減少傾向がみられたが，一方で乳幼児と母親を含む，より幅広い年代が文庫を利用していることが分かった。文庫の活動内容は，幅広く多様なものになっていた。従来文庫で行ってきたお話会や季節の行事などの開催に加え，文庫の外に出かけていく活動（文庫関係者は「出前」と呼んでいる）が多くなっていることも顕著な変化の一つであった。子育てをする若い母親の支援や，近隣の学校や幼稚園，保育園で読み聞かせを行うなど，現在は文庫での活動を中心にしつつ，さまざまな場・さまざ

まな方法で，子どもと本の活動に関わろうとしている運営者が増加している。

第Ⅳ章「文庫の変化と運営者の意識：質問紙調査より（2）」の前半（A 節）では，文庫の継続に関する運営者の意識を中心に検討した。これは，「なぜ，文庫の運営者は今も活動を続けているのか」（検討課題 3），「今，文庫を始める人はどのような人びとなのか，なぜ文庫を始めるのか」（検討課題 4）にあたる。ここでは，質問紙調査の，運営者に文庫を始めた動機と続けている理由を尋ねる設問への回答，および自由記入欄への記述を整理，分析した。

長年活動を続けている多くの文庫では，運営者は自分の子育てを終えた後も変わらず活動を続けていた。また新しく設立された文庫でも，子育てを終えた世代，退職した世代の運営者が増えていた。これらは，子育て中の若い母親が我が子の貧しい読書環境の改善のために自ら文庫の運営者になった戦後初期の動きとは明らかに異なる。現在の運営者の大多数は高齢化や少人数化，利用者の減少などのマイナス要素を危惧しながらも可能な限り活動を続けたい，という意識を示している。

現在の運営者は，過去の運営者と同様に「子どもに良い本を手渡す」，「本の楽しさを共有する」ことを動機に文庫を始めた。彼らの多くは文庫の活動を通じて得られる喜びや楽しさを原動力に文庫をやり続けたいという意識を強く持つようになる。経済的，時間的なゆとりを持つ者が施設と蔵書を整え，万全の態勢で文庫を開き，運営しているケースも多い。これは第Ⅲ章で述べた文庫の施設，蔵書の充実の動きと強く連動している。自由記入欄には「文庫は図書館とは違う」という意見も多くみられた。これは「文庫」が，現在の社会において「図書館」とは異なる役割を担っている，という自覚と自負が文庫の運営者の中に生まれ，育っていることを示している。

後半（B 節）では，主として質問紙調査の自由記述から，回答した各文庫の運営者がなぜ，どのように継続しているのか，運営者が文庫を継続させるためにどのように取り組んでいるのかなどが書かれたものを抽出・整理した。これは「文庫が継続する形にはどのようなものがあるのか」（検討課題 5）に取り組む出発点でもある。

公民館，自治会の集会室など地域の公的，半公的な施設を利用してグループで運営する地域文庫では通常は運営者が交代して文庫を継続するが，同じ運営者が長年続けているものもある。家庭文庫では一人の運営者一世代で終わることが多いが，後継者が現れることもある。ある文庫の蔵書を引き継いで新しい文庫が生まれることもあるし，一人の運営者が何度も移転しながら，その都度文庫を開いていることもある。家庭文庫から地域文庫へ，あるいはその反対と形態を変化させるものもあるなど，さまざまな継続の実態が分かった。この結果から，文庫はさまざまな形で継続していること，同一の運営者が同じ場所で，蔵書を収集し提供する活動を続けることだけが文庫の継続ではないと

判断するに至った。たとえばある文庫から「蔵書」を引き継いで新しい文庫を開く「継承」も継続の一つの形である。この多様な文庫の継続，継承の形，引き継がれる要素をさらに詳しく検討するために，活動中の文庫に訪問調査を行い，関係者への聞き取り調査，資料収集を行った。

第Ⅴ章「現在の文庫にみる継続・継承の多様性から」では，これらの活動事例を検討した。「文庫が継続する形にはどのようなものがあるのか」（検討課題 5）具体的な事例から明らかにする章である。

A 節では，第Ⅳ章 B 節の内容をもとに，地域文庫と家庭文庫それぞれの継続の形を整理して六つのパターンを示した。文庫が継続して活動するためには「場所」，「蔵書」，運営の「精神」という三つの要素がある。当初はこれら三つの要素が一体となって続くことを文庫の継続と考えていたが，三つの要素のうちのいずれかが引き継がれる「継承」も文庫継続の一つの形と捉えることにした。

B 節からＦ節では，A 節で示したパターンを参照しながら，五つの活動事例（家庭文庫，地域文庫，家庭文庫や地域文庫が組織的に活動しているもの）それぞれについて論じた。取り上げたのは，①一人の主宰者が長年活動を続けている家庭文庫，②活動をやめた家庭文庫の本を継承して新しく生まれた家庭文庫，③運営者が交代しながら活動を続け，地域の読書施設として定着した地域文庫，④一つの家庭文庫から，地域文庫，大規模な地域文庫が生まれ，それぞれ形態や方法は異なるが，役割分担をしながら一緒に活動をしているもの，⑤リーダー的な文庫のもとに，同一市内の各地域に複数の「分室」（家庭文庫，地域文庫）が生まれ，一つの共同体として活動しているもの，の五事例である。

これらのうち①～③はＡ節で示したパターンを具体的に示す事例，④と⑤は文庫が組織化して活動をしている特殊な事例であり，文庫の継続・継承の形のバリエーションの豊かさを示した。最後にＧ節でこの五つの事例において，何が継続と継承の要になっているかを改めて整理し，全体をまとめた。ここでは「蔵書」が，文庫がさまざまな形で継続，継承していく鍵となる大きな要素であることを確認した。

第Ⅵ章と第Ⅶ章では，研究課題 4 として提示した「文庫を支える仕組みには，どのようなものがあるのか」を，文庫連絡会，東京子ども図書館という二つの異なる組織からそれぞれ検討した。

第Ⅵ章「文庫連絡会：文庫をつなぎ活動を広げる共同体」の検討課題は，「なぜ，文庫連絡会は文庫の共同体として生まれたのか，どのような活動をしているのか」（検討課題 6）である。第Ⅰ章では文庫連絡会を「文庫を会員とする組織，個々の文庫を単位に形成された共同体」と定義した。ここでは文庫連絡会に関する文献，調査などを整理

し，その主たる機能と役割には，①文庫に関わる人たちの交流と学習，②行政や社会への対外的な働きかけの二つがある，とした。通常，文庫連絡会は市区町村規模の地域内に発生するが，都道府県規模といった広域的なものもある。次に，文庫連絡会が発生した 1960 年代末から現在までを，関係する各文献や調査をもとに四つの時代に分けて整理し，そのあゆみを概観した。

本論文では，文庫連絡会の現状を把握するために，2010 年に文庫連絡会に質問紙調査を実施した（有効回答は 88 件）。過去からの変化の有無をみるために日本図書館協会が 1987 年に実施した全国的な文庫連絡会の調査結果との比較も行った。現在，文庫連絡会の数は減少し，新しく発足するものはほとんどみられない。一方で，都道府県規模の広域を対象とする文庫連絡会が増えている様子もみられた。こうした広域をカバーする文庫連絡会の構成，活動内容などをみると，文庫に限らず読み聞かせの実践グループ，個人ボランティアなども広く会員の対象としていた。現在の文庫連絡会はさまざまな読書推進活動と一体となり，文庫そのものをつなぐ組織ではなくなりつつある。その活動も，会員構成の変化に伴い当初の文庫の充実と発展を目的とするものから，より広い視点から地域の読書活動を推進させるものへと変容，変質しつつある。

第Ⅶ章「東京子ども図書館：「文庫」から「図書館」へ」の検討課題は，「なぜ，東京子ども図書館は私立の児童図書館として設立したのか，どのような活動をしているのか」（検討課題 7）である。この章を論ずるために，東京子ども図書館の関係者に聞き取り調査を行い，関係する資料の提供も受けた。

東京子ども図書館は 1974 年に四つの家庭文庫（土屋滋子の土屋児童文庫，入舟町土屋児童文庫，石井桃子のかつら文庫，松岡享子の松の実文庫）を統合し，財団法人として設立した。文庫から生まれ，文庫と図書館，双方を支援する役割を担う私立の児童図書館である。筆者は東京子ども図書館を，文庫，図書館，出版を含む，子どもの読書に関する人びとに広く貢献する独特な組織と考えるが，ここでは「文庫を支える仕組み」としての役割に注目した。東京子ども図書館の母体となった文庫の三人の主宰者のうち，土屋の文庫への取り組みは第Ⅱ章で既に述べた。ここでは子どもの本の編集者，翻訳者，作家としての経験を持つ石井と，児童図書館員をめざしていた松岡がそれぞれ文庫を始めた動機，活動を整理したうえで，三人の文庫が東京子ども図書館になるまでの経緯を検討した。「子どもと本の楽しさを共有する」（土屋），「子どもの本について子どもから学ぶ」（石井），「図書館での児童サービスを文庫で実践する」（松岡），という三人の主宰者の文庫に対する異なる三つの意識が東京子ども図書館の設立によって一つになった。

主　論　文　要　旨

東京子ども図書館が文庫と公立図書館と共通する根を持ちながら，そのどちらとも異なる独自の活動を実現しているのは，「文庫」（公益性を持つ自発的な活動），「出版」（より広く子どもの良い読書環境を実現するための要素），「図書館」（文庫の「公益性」を「公共性」に変えるシステム）という三つの源流を持つためである。この三つの源流は，「子どもに良い本を手渡したい」，「子どもに豊かな読書体験を与えたい」という共通の動機を持つ土屋，石井，松岡がその動機を実現する中で最も重視した要素であり，現在の東京子ども図書館の運営を支える三本の柱である。

東京子ども図書館は文庫運営のモデルを示し，活動に社会的価値を与え，運営者の精神的な拠り所になった。これも文庫の継続と継承を支える仕組みだが，運営者たちが集まり，相互協力のために作った連絡会とは異なる立場にある。

第Ⅷ章「現在の子どもの読書環境と文庫」では本論文を総括し，知見と結論を示した。現在も文庫は続き，文庫を支える仕組みがあり，もし新たに文庫を始めようと思えばそれを実現させる道筋が示される状況にある。子どもにとっての読書の意義，価値観が社会的に共有され，その環境を改善し整備・充実させることが社会の責任であるという認識が一般化している。

2011 年 3 月に発生した東日本大震災では，これまで築いてきた子どもの読書環境が全て失われてしまった。壊滅的な被害に対応する中，各自治体の公的な力，制度は，子どもの読書にまで及ばない状態になった。この時，子どもの読書を改善することを目的とする私的な活動が生まれた。

B 節では東日本大震災の直後に岩手県陸前高田市に生まれ，活動をした三つの民間による読書施設について整理，検討した。国際児童図書評議会（JBBY）と児童書関係の出版団体が中心となって設立した「にじのライブラリー」，文庫を根に持つ東京子ども図書館とうれし野子ども図書館（盛岡）が設立した「NPO うれし野子ども図書分館・陸前高田こども図書館・ちいさいおうち」，宗教団体シャンティ国際ボランティア会（SVA）が設立した「陸前高田コミュニティ図書室」である。本論文では冒頭に示した定義（民間の人びとが，主として子どものために一定の場所を確保して本を集め，提供する活動を行うこと，さらにその活動を行う子どものための私設の読書施設）によりこれら三つの読書施設を「文庫」と位置づけた。この陸前高田市の事例は現在も文庫が生まれる理由と，文庫に関わる人びとの姿を具体的に明らかにするものである。三つの文庫は，異なる方法で被災地の子どもの読書環境の改善に取り組んだ。

C 節では第Ⅰ章から第Ⅶ章それぞれで，本論文で明らかにした各研究課題に対する知見をまとめ，D 節で結論を示した。

主　論　文　要　旨

No.9

いつの時代もどの場所にも，子どもが好き，子どもの本が好き，子どもと本に関わる何らかの活動をしたいという意識を持つ人がいる。主として子ども時代の楽しい読書の経験を持ち，読書は良いものだ，子どもにとって必要だという価値観を持っている人びとである。そういう人びとによる厚い層が日本の文化の中で長い年月の間に形成されてきた。しかしそうした意識，価値観を持つ全ての人が文庫の運営者になるわけではない。彼らは潜在的な文庫の運営者であり，なにかのきっかけを得て「文庫」という活動を選び，始めた時に文庫が生まれる。日本には無数の潜在的な文庫の支援者，間接的な運営者が存在している。陸前高田市の事例はこの潜在的な支援者，間接的な運営者を示すだけでなく，文庫が身近にいる子どもを越える子どもの読書環境へ視点を広げうること，その公益性の広がりを示している。

文庫の運営者たちは，日々の活動や仲間との交流から，文庫が社会的な公益性を持つものだという認識を持ち確信していく。この気づき，認識の変化が文庫を続ける大きな力となる。運営者には「文庫は役に立つ良い活動だから続けたい，続けなくてはならない」という一種の使命感も生まれる。しかし運営者は子どものために，という使命感だけで文庫を続けるのではない。自分自身にとっても文庫が楽しいという喜びを強く実感している。それも文庫を続ける力の一つである。文庫は年齢を問わず，人びとが社会とのつながりを持つ場であり，公益性のある活動に私的に，個人的に参加することができるシステムである。運営者が文庫を通じて，社会の中の自分の存在を確認することも文庫が継続する力を生みだす。本論文では，ある文庫の精神を受け継ぐ，あるいは手渡すことが「蔵書」というコレクションによって実現されること，文庫が継続することも示した。「蔵書」は文庫継続の大きな鍵である。

本論文で文庫を支える仕組みとして取り上げた文庫連絡会と，東京子ども図書館は，文庫の活動を支援する役割（文庫に対する働きかけ）と，文庫の力を社会に流し込む回路としての役割（行政や社会に対する働きかけ）とを持つ。

文庫連絡会は会員文庫の活動を充実させたり，支えたりするだけでなく，文庫の集合体として，その地域の子どもの読書環境の改善や充実を推進することを社会に訴えていく一つの組織，運動体の役割も担う。文庫連絡会が文庫の集合体として図書館や自治体に働きかけていくとき，文庫は子どもの読書環境の改善と充実に貢献しうる一つのシステムとして社会に認識される。文庫の運営者が経験と知識を蓄積して力を蓄え，文庫という組織が定着，認知させるようになった現在，文庫連絡会の視線はもっと広く，子どもの読書推進活動全体に向くようになった。これは子どもの読書推進活動が多様な側面から展開されるようになった現在の状況を反映している。

主　論　文　要　旨

No.10

東京子ども図書館は，文庫，出版，図書館という三つの源流を持ち，横断的に子どもの読書環境を支える組織である。文庫を母体として生まれた東京子ども図書館は，文庫の源流を活動の最も大切な基盤，精神の柱としている。だからこそ東京子ども図書館の活動の多くは，文庫を支援するためのものであり，多くの文庫関係者たちも，東京子ども図書館を文庫運営の手本，自分たちの理想として心の支えにしている。

文庫の運営者たちは，子どもに楽しい読書の経験させたい，読書の喜びを子どもと共有したい，という共通の思いを実現するために，それぞれがそのときどきに置かれた状況に応じて柔軟に，最適な方法を選んで活動をしている。この文庫の多様性，柔軟性は，地域の住民への公平・平等なサービスを基本とする現在の公立図書館が成し得ていないことであり，文庫ならではの力，働きである。公の枠組みでは埋めることができない間隙に，文庫という私的で柔軟性のある力が入り込むことによって，現在の日本の子どもの読書環境の充実と整備の状況が実現したといえる。

本来，子どもの読書環境を支える要素は一つではない。図書館や文庫での働きかけだけでなく，各種の読書推進運動，作家や出版社といった出版文化を含む複数の要素によって子どもの読書環境は成立している。これを子どもの読書に関するネットワークとして考える時，文庫には子どもの読書に関わるさまざまな領域を自由に横断して取り込める，という可能性がみえる。東京子ども図書館は，このネットワークを文庫の「私」の力をもとに実現している一つの例である。

このほかにも，文庫の研究はさまざまな研究の可能性を内在している。日本における文庫と公立図書館それぞれの役割，子どもの読書施設における「蔵書」のあり方，子どもを中心とした日本の読書文化，児童書出版の意義などが文庫を起点とする今後の研究テーマである。

Thesis Abstract

No. 1

Registration Number:	□ "KOU" □ "OTSU" No. *Office use only	Name:	Junko SHIOZAKI

Title of Thesis:

子ども文庫が生まれる理由，続ける力，支える仕組み

Kodomo-bunko: children's private libraries in Japan

Summary of Thesis:

The purpose of this thesis is to understand current *kodomo-bunko* in Japan. *Kodomo-bunko* is a compound word composed of *kodomo*, which means children, and *bunko*, which originally meant a place to collect and store privately-owned books. *Kodomo-bunko* means a private children's library system that is unique to Japan and run by volunteers. This system developed soon after World War II when some individuals, primarily mothers, wanted to start a library for neighborhood children with books they owned to improve children's reading environment. The movement spread rapidly throughout the country.

Although public libraries have been enhanced and popularized, many *kodomo-bunkos* still exist. This study seeks to address why *kodomo-bunkos* are started, what maintains them, and what mechanisms support them.

To understand *kodomo-bunkos*, questionnaires were sent to operators in 2010, and 528 valid responses were obtained. The data show that many operators started *kodomo-bunkos* because of a fond childhood reading experience and a desire to share reading with children. In addition, *kodomo-bunko* was a form of connection between operators and society.

The data also show that the number of *kodomo-bunkos* has decreased, partly due to the aging and decreasing number of operators. All three core elements of *kodomo-bunko*—place, book collection, and spirit—are not always maintained when the founding operator leaves. Book collection, particularly, is the most important of the three. Based on qualitative analysis of interviews with operators, the form of continuation of *kodomo-bunko* was patterned. As for the motivation to continue, operators identified *kodomo-bunko*'s role and public interest. Operators shared a sense of mission to maintain their activity.

Bunko associations and the Tokyo Children's Library were identified as mechanisms that support *kodomo-bunkos*. In the late 1960s, bunko associations were formed to provide operators with opportunities to learn and interact, and to connect society with *kodomo-bunkos*. Many current bunko associations transformed themselves from organizations that simply bundle *kodomo-bunkos* to those that work to improve children's reading environment. The Tokyo Children's Library—established in 1974—is a unique private children's library formed by four *kodomo-bunkos* with the aim to enrich *kodomo-bunkos*, children's libraries, and children's books. Since then, the Tokyo Children's Library has played an important role in ushering in the current form of *kodomo-bunko*, providing a model for children's services in public libraries, and publishing quality children's books.

Thesis Abstract

Following the Great East Japan Earthquake in 2011, three *kodomo-bunkos* were born in Rikuzentakata city, Iwate prefecture where the municipal library was destroyed by the tsunami. This proves that those who are interested in children and children's books will take action to create *kodomo-bunkos* when children's reading environment has suffered. *Kodomo-bunkos* work flexibly and quickly to respond to gaps that public libraries cannot fill.

This research demonstrates that children's reading environment in Japan has improved through not only reading facilities provided by *kodomo-bunkos* and public libraries, but also a reading promotion movement, publishing culture, and so on. The flexibility of *kodomo-bunkos* and the Tokyo Children's Library enable the network that works to improve children's reading environment.